

中原中也「盲目の秋」の「III」を読む

小川 敏 栄

中原中也の詩「盲目の秋」は『白痴群』第六号（昭和五年四月）に発表され、詩集『山羊の歌』（昭和九年二月）に収められた。ローマ数字で区別された四篇からなる組詩である。ここでは、その「III」を読む。（テクストには昭和四十二年角川書店刊の『中原中也全集』第一巻を使用した。）

まず第一連を掲げる。ただし五文字を伏せて。

せめて死の時には、

あの女が私の上に□□□□□くれるでせうか。

その時は白粧（おしろい）をつけてゐてはいや、

その時は白粧をつけてゐてはいや。

この五文字は何か。「涙を流して」というのが大方の答であろう。正解は「胸を披（ひら）いて」である。心を開くことの比喻表現ではなくて、母親に乳をもらう赤子のように、裸の胸をねだるのである。もちろん現実には「死の時」を迎えているわけではないが、夢の甘美さに惹かれ、「私」

はその情景に入り込んでしまう。「あの女」という三人称の存在が、臨終の「私」の前にいる二人称的存在に変わる。

「その時は白粧をつけてゐてはいや。」という、女性的、幼児的な甘えた言葉の繰り返しは、「私」と女との特別な関係だけでなく、死の床にある「私」の無力性を語っている。「私」は腕を持ち上げることもできないだろう。

ただ静かにその胸を披いて、

私の眼に輻射してゐて下さい。

何にも考へてくれてはいや、

たとへ私のために考へてくれるのもいや。

言葉は無論のこと、言葉となる前の思考の営みさえも拒まれる。以心伝心を排した場所で、胸から眼へと不思議な「輻射」がなされる。

ただはらかににはらかに涙を含み、
あたたかく息づいてゐて下さい。

——もしも涙がながれてきたら、

*おがわ・としえい

埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授

涙を含むのは女の眼ではない。「私」の眼の前にあたたかく息づく女の胸である。そして、この静かにかすかな動きの安定した繰り返しの中にいる時が「私」にとつて最後の至福の時なのである。それは涙という不安定なものを擁しながらしばし達成された奇跡的な均衡の時である。しかし、それがいつまでも続くはずはない。

ためらいをうかがわせるダッシユのあと、「もしも涙がながれてきたら、」という条件文で、この連は終わる。四行、四行、三行、三行というソネット形式が効果的に利用され、連またぎという手法で、いわばタメをつくるのである。読者もそれなりの心の用意をもつて臨むはずだが、最後の連は予想もなかった展開となる。

いきなり私の上にうつ俯して、

それで私を殺してしまつてもいい。

すれば私は心地よく、うねうねの瞑土よみちの径を昇りゆく。

涙を含むのは幸福の必要条件であつた。涙を流すのはそこに罅ひびを入れることである。しかし既に至福に浸つた「私」であれば、もはやこの世に思い残すことはないであろう。それにしても「それで私を殺してしまつてもいい。」という言い方は尋常でない。「せめて死の時には」と冒頭にあつたように、女は去つたあと何度呼びかけても帰らなかつた。それが「私」の罪によるという意識のあることが先の言葉からうかがわれるのである。

以上のように、「盲目の秋」の「III」は、「私」の罪でかつて去つた女が「私」の臨終の際に現れ、至福をもたらしことを夢想する詩である。女の感情が迸り出る前に、静謐さの豊かな広がり包まれるという幸福の有り様を、女の胸と涙と「私」の眼の関係として記したところに、この詩の核心がある。「私」の眼の前に女の顔はない。あるのは胸だけである。人は死の時に女が涙を流すことを望むだろうが、それは「私」にとつてこの世での至福の時の終わりなのである。

では、そのあとどうなるか。至福の時の名残があるかのように「心地よく」、エロスとタナトスの絡み合つたような「うねうねの瞑土よみちの径」を、下るのではなく「昇りゆく」、と詩人は書く。その先にあるものについては「盲目の秋」全体を見なければならぬ。